# 中高生とともに差別と闘う

## 『娘へ』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

### 伝えたかった相手

シンジが中学生集会で訴えた、自身が体験してきた部落差別の現実。その伝えたかった相手とは――

＊

部落問題を考える、同和問題を考えるっていうのは、素晴らしいこと、すごいことだと思うんですけど、裏返したら口惜しさがあるというか。

今日は泣いたらアカン理由があったんです。何か特別な日になるなって今日は思ってたんです。来る前からずっと。

自分が部落出身であるということを娘に伝えるのが、すごく怖いんです。なんかね、その部分に関してすごく怖かったんです。

＊

シンジが伝えたかった相手とは、実は自分の娘でした。娘に、自分のルーツに部落があることを伝えるべきか、伝えぬべきか。伝えるとすれば、いつ、どんなタイミングで、どんなふうに伝えればいいのか。そのことをずっと考え続けていたのです。

そのことを話しはじめます。

＊

いま、小学四年生なんです。すごく怖くて。やっぱりね、繊細なだけに、どう思うんだろうなとか、どう向き合うんだろうなとか、自分の中で葛藤が何年もありました。産まれてからも、どうなんだろな、いつ言うんだろうなっていうのがすごくね。大切な子どもに対してね。でもそれは明らかに自分の中で、この子が差別されてしまうっていうことを描いてしまってるからダメなんですね。差別に対して向き合うことをさせなかったら、まず親としてダメなんだと思うんですね。

＊

語尾に「ね」を多用するなかに、彼の「想い」の余韻を感じさせます。ややもすると堅苦しく、重くなりがちな内容を、どうにかして分かりやすく、やわらかく伝えたいという想いがにじんで見えます。

そして――

### 娘へ

あのね、ボク決めたんです。伝えようって。それでね、今日連れてきてるんです。小学四年生ですけど。娘に、今日来ることの意味、中学生集会に連れて来ることの意味、話をすることの意味っていうのを、ただ単に来ただけではたぶん何も伝わらないと思って。そこの段取りをして来たんです。

＊

中学生集会本番の数日前、彼から電話がありました。「コロナで中止になったりはしませんか？」という問い合わせでしたが、本当は、「娘を連れて行こうと思うんです」という覚悟を決めたという連絡でした。

パパの「宣言」を、フロアのイスに座る娘はどんな思いで見ていたでしょうか。いつもとどこか違う雰囲気のパパ。いつも元気で楽しくて、ふざけてばかりいるパパ。それが、ステージの上で涙をこらえて一生懸命に語る姿に、眼も心も釘づけになったのではないかと思います。内容はよくは分からないけれど、パパの気持ちが乗り移ったかのように、身じろぎもせず、真剣な面持ちで、その小さな体ですべてを受けとめようとしていたのではないかと思います。

シンジにとっては、この一瞬のために、娘と関わるこれまですべての時間を費やしてきたと言ってもいいでしょう。決してマイナスに捉えさせたくない。マイナスに思えるようなことをすべてひっくり返し、プラスにしてしまいたい。伸るか反るか、ギリギリの大勝負でした。

### ボクの個人懇談

そして親として、この数日にしてきた「段取り」について語り始めます。

＊

二日前、娘の学校に行ってきたんです。夏休みの個人懇談があって。娘の個人懇談はいつもボクが行くんです。娘には、「パパ、何言われるか分からないから覚悟しといてよ」って言われつつ行ったわけですけど。

先生とテストのこととかいろんなことを話すのもさておいて、「この日曜日、実は中学生集会っていうのがあってね、ボクちょっと行くんですよ。なぜかというと、ボクは部落出身の人間です。そこに対してすごく誇りをもってて、中学生のみんなにいろんな思いを伝えたい。娘にもちゃんと伝えていきたい」って。そしたら個人懇談がね、娘個人じゃなくて、ボク個人の懇談になってしまってね。娘には申し訳ないと思うんですけど、終わった後、すごいスッキリした気持ちになりました。言って良かったなっていうか。

＊

娘がパパのルーツを知ったとき、ショックを受けないか。困惑し、悩み込まないか。友達関係で苦悩しないか。もしそうなったときのため、学校の先生にもサポートしてもらいたい。しかし、サポートしてもらうためには、自分のなかにどんな思いがあるのかを知っておいてもらう必要がある。つまり、自分の胸の奥底にある部落差別への思いをしっかりと語らなければならない。そう考えたのです。

どんな部落差別を体験し、どんな思いで生きてきたのか。差別のなかを懸命に、誠実に生き、育ててくれた父への思い、母への思い。部落差別をはじめとする様々な差別問題について、とことん本音で語り合ってきた中学時代の友への思い。そして、今も残る、あの懐かしい景色。故郷への思い。そのことを語らずして、学校の先生方に分かってもらえることはないと考えたのです。



イラスト　中島　亜唯